ISSN 0919-4657

KONC

Bulletin of Kansai Organization for Nature Conservation

関西自然保護機構会誌

24巻2号（通算44号）



2003年3月
関西自然保護機構

表紙の言葉

「里山の概念」

写真・文　布谷　知夫

「里山」は「自然と人間」とのかかわりについて考えるための重要なキーワードであることは間違いがない。表紙の写真は里山のメッカともなっている滋賀県大津市仰木の里山風景である。ところでこの表紙の写真を見て，里山の写真だと思われるであろうか。実は里山という言葉は，人によって異なったニュアンスで使われている。

「里山」という用語は，関西自然保護機構前会長の四手井先生が始めて使われたものである。四手井先生は農用林に代わる用語として使ったとした上で「農用林とは，農家の正業にとって直接必要欠くべからざる産物を直接的に農家に供給している森林を指す。だから平野部の田畑に直接面している農家の裏山が，その場所になる」と書いておられる。四手井先生によって，里山とは人がマキやシバをとるために管理してきたことで同じ状態で長く維持されてきた林とされた。おそらく集落周辺の林を人の利用とのかかわりで，あるいはもっと踏み込んで人が利用したからこそ維持された林と位置づけたことに，四手井先生の先見性があったのだろう。

里山の保護を明確にテーマにした全国でも始めてのシンポジウムは，1983年に，大阪自然環境保全協会が，大阪市立自然史博物館を会場にして行ったものである。関西自然保護機構も1980年には「日本の自然と二次林」というシンポジウムを行っているが，人のくらしとのかかわりは鮮明ではなかった。当時の大阪ではくらし周りの身近な自然がほとんどなくなっていたため，自然環境保全協会では特に能勢地域に残された林を里山として保護しようという運動を起こし，利用がされなくなって放置されているのであれば，積極的に保護運動として林の管理を行おう，という市民運動が開始された。この運動は里山管理運動として全国各地に広がり，マニュアル化されたような側面もある。そして里山という用語が各出版社の国語辞典などに載っていなかったため，各社に要望書を出すなどの宣伝行動も行われた。しかし里山保護運動は，市民による運動，よく言われる言い方をするならば町の人が行う運動であり，地域のくらしと結びつくことができなかったため，なかなか新しい展開はできなかったように思う。

そして里山がより広く注目されるようになったのは，1990年代の半ば，あえて言わせていただくなら，1995年の写真集「里山物語」の発行と，1996年の琵琶湖博物館開館記念特別展示「里山　今森光彦写真展　命の小宇宙」の実施が契機になったものであろう。アウトドア志向や自然志向とうまくあって，今森さんが写真を撮り続けている大津市仰木は，日曜日ともなると車が押し寄せ，ついに里山を見るための駐車場が作られるに至っている。

ところが今森さんはこの里山という用語をまた違った意味で使っている。彼は「雑木林や田んぼの水辺に集まる虫たち，のどかに農作業をする人々，自然と人とがおだやかに調和するこの田園を里山と名づけて」といい，集落と田畑，水路，そして周囲の林を含んで，普通に言えば農村的風景全体を里山と呼んでいる。そしてどちらかというと，最近では里山という用語は，今森さんのいう広い意味の里山が使われることが多いようである。しかし広い意味での里山という用語は，まったく自然体での人の暮らしを扱っているために，本人の意図とは離れて，自然と人間とのかかわりを突き詰めるということにはつながっていかず，美しく懐かしい自然としてだけで，農村が捉えられてしまう可能性があるような気がする。

最近の里山の議論には，時間と広がりとが考慮されていないように思える。里山の保全は誰しもが口にするが，里山の何を，何故残す必要があるのかがなかなか議論されていない。定着農耕生活が始まって以後，2000年を越える長い時間，広い面積の里山が維持されてきた。長い時間と広い面積があったからこそ，全体としては特別な計画があったわけではないのに，さまざまな状態の里山があり，多様性の高い自然が維持されてきたことを考えるべきであろうと思う。